

2021. 6. 13. 主日礼拝説教
聖書：ヨハネによる福音書10章1-6節
『羊の囲いに入るために』

シルヴァスタインの「おおきな木」という絵本があります。昔、大きなリンゴの木があつて、ひとりの子どもが毎日遊びに来ました。リンゴの木はその子が大好きでした。しかし、男の子は大きくなってリンゴの木のところ遊びに来なくなり、リンゴの木が寂しくしていると頃にひょっこりやって来て言いました。「僕はお金が欲しいんだ」。そこでリンゴの木は言いました。「わたしの実を採って売ればいい」と。

するとその子は実を全部もいでいってしまいました。でもリンゴの木はうれしかったのです。再びその子が来た時には、「家が欲しい」というので「枝を切って家を建てなさい」と言うと、男の子は枝という枝を全部切って持って行てしまいました。でも、リンゴの木はうれしかったのです。次にその子が来た時は、もう中年を過ぎて疲れた男になっていました。「疲れたからどこか遠いところへ行きたい」と言うので、「わたしの幹で舟を作って、それで行けばいい」とリンゴの木は言いました。男はその通りにして行てしまいました…。

それから長い年月が経って、切り株だけになったリンゴの木のところヨボヨボの老人になったあの子が帰ってきました。「わたしにはもう何もあげるものがないんだよ。すまないねえ」とリンゴの木は言いました。「いいや、わしは年をとって歯も弱くなりリンゴもかじれないし、枝にもぶらさがれないよ。今は静かに座って休む場所さえあればいい」と老人は言いました。リンゴの木は精一杯背筋を伸ばして彼を切り株に腰掛けさせました。それでリンゴの木はとでもうれしかったのです。

ヨハネ福音書では10章の1節から21節までいわゆる羊シリーズが描かれます。特に11節には「良い羊飼いは羊のために命を捨てる」というみなさんも暗唱されてる程の有名な句があります。そもそもこの羊という動物は非常に臆病で、ヤギと比べても知能・視力・聴力が劣り、単独で身を守れない動物だそうで、羊飼いかも世話をするのが大変だったといひます。何かに驚いて暴走して

集団で谷底に落ちたり、少し無理して長旅をさせるとバタバタ死んでしまう程に耐久力もなく扱いにくい生き物としてこのように聖書にも登場するのです。まるでわたしたちみたいなものではないでしょうか。羊飼いで、そんなめんどろな生き物を命がけで世話するのはまっぴらごめんという者もいます。それは自分の羊を持っていない雇い人や盗人、強盗だと聖書は語ります。この「自分の」という関係への踏み込みがあるかないかでは全然事柄は違ってきます。「自分の」という関係は責任感と使命感、そして愛情とそれを実現する力と継続する強い意志を産み出すのです。「我々も」とか「みんなの」と言うに出てこない力が「わたしの」の中にあるのです。

キリスト・イエスもわたしたちのために自らの命を十字架の上に投げ出して下さいました。このイエスに「わたしの羊」「自分の羊」と言ってもらっているのですから、たとえ驚くことがあっても暴走せず、不安なことがあっても投げやりにならず、思い通りにいかなくてもあきらめず、希望と感謝をもって生きましょう。羊の囲い、つまりわたしたちの意固地な心の囲いを愛と自由を以て打ち破り、わたしたちを招かれるキリスト・イエスは必要なものをすべからく与え、いつもわたしたちを豊かに養って下さるのです。